

諸鈍方言の動詞の終止形おぼえがき

まつもと, ひろたけ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

164

(終了ページ / End Page)

180

(発行年 / Year)

1995-02-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012661>

諸鈍方言の動詞の終止形おぼえがき

まつもと ひろたけ

(はじめに)

加計呂麻島諸鈍方言は奄美大島南部方言に属する。ここの方言の動詞の活用には徳之島方言ほどではないが、ヲリの融合しない旧連用形の終止的な用法がみとめられる。また、1、2段系の活用タイプの動詞にラ行4段化しないかたちが共存していることが、ほかの奄美諸方言よりおおいようである。これらは南琉球方言に属する宮古方言につながるふるい層とされる。終止形のm語尾形が沖永良部方言以外の琉球方言とちがって~mのかたちを保存している点にもふるさがあらわれている。

以下では諸鈍方言にもみられる標準語ノム、ノマナイにあたるみとめかた(肯定・否定)のカテゴリーのなかで対立する二系列の動詞の終止形の活用をきれつづき(文中での機能)にそってみていくが、ていねいさのカテゴリーにくわる、標準語ノミマス、ノミマセンにあたる、ていねい系列についても、ここでふれておく。

(標準語)			(諸鈍方言)		
	ふつう	ていねい		ふつう	ていねい
みとめ	ノム	ノミマス	みとめ	numjur	numjo:r
うちけし	ノマナイ	ノミマセン			numja'or
			うちけし	numam	numjo:ram
					numja'oram

ていねい形のうち numjo:r にあたるかたちは奄美大島北部方言にも numjo:ri としてでてくるが、numja'or は南部方言にしかきかれない。諸鈍方言では両方のかたちを区別なくつかう。

諸鈍方言の numjo:r 形がていねい動詞的であることは

・ tuNnju tubjo:r. トリガ トビマス。

のような用法のゆるされることからわかるが、標準語の~マスほどていねい動詞化していないようである。

・ waNna sēhē numjo:r. ワタシハ サケラ ノミマス。

はノミマスとちがいなお謙讓性がのこっているという。謙讓的な numjo:r は numja:bīr ノミハベリでおきかえることができる。numja:bīr は numjo:r, numja'or よりもふるいが、諸鈍方言でも以前はつかうひとがいたという。上記の表からは省略した。

・ waNna sēhē numjabīr. ワタシハ サケヲ ノミマス。

・ gasi darjo:r. = gasi darjabīr. ソウデス。

今回はこの種の問題をふくむていねい動詞系列にはこれ以上ふれない。以下の例文にはていねい動詞系列のものもはいっている。

(1) 終止形をみとめ動詞、うちけし動詞の順にとりあげる。みとめ動詞の終止形はモード、テンスのカテゴリーにそった対立にしたがってみていくと、まず、テンスの対立のある叙述法、うたがい法、たずね法とその対立のないはたらきかけ法、ねがい法にわかれる。テンスの対立のある前者はさらに断定-推量の対立のある叙述法、うたがい法とその対立のないたずね法とにわかれる。このパラダイムのくみかたは絶対のものではなく、別の対立のさせかたもかんがえられる。

(みとめ動詞終止形 叙述法)

		すぎさらず	シタすぎさり	シタッタすぎさり
断	連用起源形	num(-)	nudī	numjutī
	ヲリ形	numjur	nuda	numjuta
定	m 語尾形	numjum	nudam	numjutam
	動名詞起源形	numjus	nudas	numjutas
法	かかりむすび形	numjuN	nudaN	numjutaN
推量法		numjuro	nudaro	numjutaro

叙述法断定の終止形は標準語とちがって、メンバーが複雑である。まず、諸鈍方言には他の奄美諸方言同様かかりむすび終止形があって、それはかかりの～ du をうけたときにだけあらわれる。それ以外はかかりのかたちによってしばられない。

すぎさらず形の語幹のつくりからは、ヲリにあたる動詞を融合させた numjur 以下のヲリ融合形と、そうでない連用起源形 num- とにわけることができる。ただし、ar アリだけはヲリ融合形をもたない。

つぎにみるテンス＝アスペクト的な意味の点からは、進行中のうごきをあらわすことのない numjum 系列と、まがりなりにもそれをあらわせる numjum 以外とにわけられる。m 語尾形と非 m 語尾形とをわけると、この特徴は断定法の下位区分として重要かもしれない。この m 語尾が、推量法のつくりにもかかわっているとすれば、カテゴリーの対立の点でいる

いろいろなことをかんがえさせてくれる。

いわゆる「終助詞」がこれらの終止形にさらにつくことがあるが、それについては省略する。

(2) ここでテンスの三系列について、テンス的な意味にアスペク的な意味をからめて、かんたんにふれておく。すぎさらず系列は、シヨル形を出発点としているが、標準語とおなじく、ひとまとまりの、テンス的には未来のうごきをあらわすのがふつうである。とりわけ、m語尾形は現在進行中のうごきにはつかえない。融合したヲリが、いわば語尾 -m の意志＝未来性にまけている。ほかの、num 形は(例文はあとで)、進行形のうごきもしめすことがあるし、動詞によっては結果の状態(～過去)的にみえるものもある。また、ヲリ形も現在進行中のうごきをしめすことがあるが、ふつうは進行中のうごき(や結果の状態)はシトル系列 nudur であらわす。

・ amĩnu hu(r)jur. アメガ フッテ イル (アメガフルの意味がふつう)。

・ amĩnu hutur. アメガ フッテ イル。

動名詞終止形、かかりむすび終止形も現在のうごきをあらわすことができる。

・ arĩ numjus. カレハ ノンデルジャ ナイカ。

・ nuga numjuN. ナニヲ/ナゼ ノムカ/ノンデ イルカ。

推定法 numjuro はノムダロウの意味である。ただし、同音形式のさそいかけ法のかたち numjuro ノンデイヨウがある。これについてはあとでふれる。

シタすぎさり系列は標準語のシタすぎさりの意味用法のワク内におさまるようである。ただし、標準語のシタ形の用法の一部はつぎのシヨッタすぎさりがになる。シヨッタすぎさりとは標準語シテイタの意味か、ヨク～シタという習慣をあらわすかになる。前者だとシトルにあたる nudur 系列の過去 nuduta とせりあう。標準語シテイタの意味は nuduta であらわすのがふつうだが、numjuta とのせりあいがのこっている点で、大島北部方言などよりふるいようである。

・ ar'ja sēhē numjuta. (=ar'ja sēhē nuduta.)カレハ サケヲ ノンデ イタ。

・ wahaſaN tu²kiNja 'i: sēhē numjuta (×nuduta). ワカイトキニハ ヨク サケヲ ノミヨッタ。

numjuta は numi'uta という融合のすすんでいないかたちもある。ヲリの意味のいきていることのあらわれとみられる。またm語尾形、動名詞終止形その他でもここではシテイタの意味になる。

(3) 連用起源の終止形はすぎさらず形が非ヲリ融合の旧連用形ノミにあたるかたちから、シタすぎさり、シヨッタすぎさり形がそれぞれシテ、シヨッテにあたるシテ連用形からなる。

nudī, numjutī は、nuda, numjuta が反省、回想的で詠嘆をともなう感じなのに対し直観直叙的という。諸鈍方言の num(-) には、強変化タイプでもなんとか単独の用法がみられるところが、北部方言とちがうが、やはりふつうはうしろに「終助詞」をつけてつかう。この bound-form 的なことを num(-) のハイフンでしめしておく。

- ・ waga tur(ga). ワタシガ トル(ヨ)。
- ・ nadi haci ikdo. 名瀬へ イク トコロダヨ。
- ・ kju: ja ami hur. キョウハ アメフリダ。(hur—×hurjur)
- ・ nadi izi:do. 名瀬へ イッタノダヨ。
- ・ wahašan tukiNnja 'i: sehē numjutī. ワカイ トキニハ ヨク サケヲ ノミヨッタ。

tur トル、kak カク、si: スルなどは -ga をつけなくてもつかえるが、iziga デル、mirga, mirga ミルなどは -ga をつけないとつかえない。ki:, ki:ga クルなどふつうは -ga がつくものもある。旧連用形起源の numga, numdo は、あとであつかう numjurga, numjuqdo のようなヲリ融合形とくらべると、切迫した感じをともない、感情＝詠嘆的だというのが、ヲリ融合のすぎさらず系列にくらべても、おなじ連用形起源のすぎさり nudī, numjutī にくらべても、つかわれかたはずとすくない。終止形の体系から num(-) をはずしたほうがいいのかもしれない。なお、numjur もヲリ融合形ながら、つくりはノミ・ヲリにさかのぼる連用 (= 終止) 形である。

旧連用形終止のすぎさらずは例文のしめすように未来のうごきも進行中のうごきもあらわすことがある。ただし、つぎのようなつかいかたもある。こうみるとテンスのワクにおさめるのは問題かもしれない。

- ・ nja ki:na. (ソコニイルヒトニムカッテ) モウ キタノカ。
- ・ nja: simna. モウ スンダカ (モウ スモウト シテイルカ)。

なお、諸鈍方言の動詞の活用タイプ全般については、松本「活用タイプの記述のために—奄美大島南部方言のばあい—」(『国文学解釈と鑑賞』1991. 1月号、至文堂)であつかつてみた。

(4) 旧連用形終止のすぎさらず弱変化活用タイプの動詞だと、強変化タイプになかった語形があらわれることは、松本「奄美方言の動詞活用にみられる一特徴—活用のタイプと活用体系—」(九学会連合『奄美 自然・文化・社会』1982 弘文堂)でふれたが、そのとき省略した動名詞起源形もくわえて atmi…atmi's アツメルでしめすとしたようになる。弱変化タイプの旧連用形すぎさらず atmi(-)も、強変化の num(-)とおなじく、「終助詞」をつけないとつかえない。これに対して、語尾が～r, ～m, ～s になっているかたちは非ヲリ融合終止形としてヲリ融合系列のそれぞれの語形と対立する。つまり強変化タイプだと numjur—numjum—numjus と一列のところが、弱変化タイプでは atmi r—atmi m—atmi s

および *atmī (r)jur-atmī (r)jum-atmī (r)jus* の二系列になる。

(弱変化タイプ旧連用形起源すぎさらず)

旧連用形	強変化 num(-)	弱変化 atmī (-)
ラ行強変化形		atmīr
m 語尾形		atmīm
動名詞起源形		atmīs

(5) ヲリ形 *numjur* ふつう三人称主語と呼応する。そこで、第三者のことをたずねられたばあいのこたえとしてはヲリ形がつかわれる。単独でつかうこともできるが、*-sa*, *-do*, *-ga* などの「終助詞」をつけてつかうことがおおい。このさい、*numjur-* の語末が *numjuqsa* ノムヨ、*numjuqdo* ノムゾ、のように変化するばあいがある。(numjurga はそうならない。) なお、ヲリ形のすぎさり系列は標準語とおなじつくりだが、琉球方言研究でチェンバレン以来 *apocopated form* といわれているかたちと同一である。

- ・ aN²cjuja sehē numjur. アノ ヒトハ サケヲ ノム。
- ・ tuNnju nacjur. トリガ ナイテ イル。
- ・ iNnu bē:ta. イヌガ ホエタ。
- ・ arga gasi icja. カレガ ソウ イッタ。
- ・ gasi sīrba warīqdo. ソウ スルト ワレルヨ。
- ・ arga gasi icjado. カレガ ソウ イッタゾ。

三人称主語でなくても、ヲリ形をつかうことはできる。

- ・ waga ikjur. ワタシガ イク。
- ・ isjogaraNba u²kuriqdo. イソガナイト オクレルヨ。

ヲリ形、m 語尾形、動名詞起源形に関しては服部四郎「奄美大島諸鈍方言の動詞・形容詞終止形の意義素」(『言語学の方法』1960岩波書店所収)で意味のちがいがふれられている。

(6) m 語尾形はヲリ形にくらべてはなしてのかんがえという面がつよくおしだされ、反省的ないろあいをおびると説明されたりする。また、はなしてが自分のことをたずねられたら、このかたちでこたえる。こういうことから一人称主語とむすびつきやすい。一般に、m 語尾形は〜スル(シタ)トオモウのような意味あいになるという。また、終止形を代表させるかたちとしてはヲリ形があげられるなど、m 語尾形は、意味的にもつくりの点でも、この方言ではマークされたかたちであるようだ。

- ・ (ura kakjuNnja. キミ カクカ。-) kakjum. カク。
- ・ waga izim. ワタシガ デル。
- ・ sēhē nudam. サケヲ ノンダ。
- ・ sēhē numjutam. サケヲ ソコデ ノンデイタ。
- ・ acja: amīnu hurjum. アシタハ アメガ フルト オモウ。
- ・ taro:du ikjum. 太郎ガ イクト オモウ。(はなしのておもわくの)
- ・ arga gasi icjam. カレガ ソウ イッタ。(icja に対してニュアンスあり)
- ・ uraga sjam. オマエガ シタ。

(7) 動名詞起源の終止形 numjus はノムニキマッテルジャナイカという反発的な、さらに、ノムガソレガドウシタというようなけんかごしの意味あいになる。

(ar'ja numatija. カレハ ノマナイカイ。-) arī numjus. (ミテゴラン) カレハ ノンデルジャ ナイカ。

- ・ waga izis. オレガ デルンダ。
- ・ waga numjutas. オレ ノンデタジャ ナイカ。(あいてに確証確認させる)

numjus の動名詞としての用法は痕跡的で、この方言は終止形への転籍がほぼ完了している。

(8) かかりむすび終止形 numjuN は終止形叙述法では、古代語〜ヅにあたる〜du のかかりをむすぶかたちとしてあらわれる。このかたちは諸鈍方言では連体形と同音形式である。numjuru はうたことばのかたちで、はなしことばにはでてこない。

- ・ sēhēdu numjuN. サケヲコソ ノムノダ。
- ・ taro:du ikjuN. 太郎ガ(コソ) イクノダ。
- ・ sēhēdu aN. サケシカ ナイ。(サケデ アルノダの意味にもなる)
- ・ sēhēdu nudaN, bi:ruja numaNta. サケハ ノンダガ、ビールハ ノマナカッタ。

〜du aN は〜シカ ナイにあたる方言形のように感じられているようである。また、さいごの例は文が終止せず逆接的につづくが、諸鈍方言では〜du+かかりむすび形でいいおわるほうがふつうである。

なお、主格をあらわす〜ga, 〜du とかさなる (〜gadu)、(〜nudu) はこの方言にはあらわれない。とりたて対格とかさなる (〜badu) もないが、〜kusa (<コソハ) に -du のついた -kusadu のまえには〜ba があらわれる。ただし対格的ではない。また、動詞条件形なども〜du でとりたてられる。

- ・ urbakusadu aN. ソレガコソ アルノダ。

かかりの〜du がきても、かかりむすび形で終止しなくてはいけないとはかぎらない。た

たとえば、おしはかり法は *séhě numjuro*, *séhědu numjuro* のように、ともに同形である。叙述法でも *séhědu nudaN* が一番適当だが他のむすびかたもありうる。

- ・ *séhědu nudam*. (反省、おもわくの)
- ・ *séhědu nuda*. (いえないことはない)
- × (*séhědu nudas*) (いえない)
- ? *séhědu nudī*. (未確認)

かかりむすび終止形は、疑問詞をもつたずね法でかかりの *~ga* (<~か) があらわれたときにもつかわれる。

(9) 叙述法その他に、断定法—推量法の対立があるのは、標準語にもみられる日本語の特徴とっていいだろう。推量法 *numjuro* は本土方言、標準語のかたちにかかい~o でおわるつくりであって、奄美大島全域にわたって、他の奄美諸島にみられる~a でおわるかたちはない。(喜界島方言には~o 形と~a 形が共存する。) すぎさらずの *numjuro* は三人称の主語がきて推量をあらわす。(二人称主語でもいいようである。) シテイルダロウの意味はほとんどすたれていて、スルダロウの意味である。

- ・ *taro:ja ka²kjuro*. 太郎ハ カクダロウ。
- ・ *arīm nudaro:ja*. カレモ ノンダロウ。

numjuro がノンデイヨウにあたるさそいかけや意志の意味になるときは同音形式としてさそいかけ法のメンバーにくわわる。

奄美南部—沖縄諸方言の推量法にみられるハズとのくみあわせは、かたちとしては *num hat* (<ノミ ハヅ)、*numjuN hat* のようにみとめられるが、意味は本土方言標準語のノムハズダ、ノムコトニナッテイルにひとしい。

名詞アンバイとのくみあわせも推定、伝聞的な意味になるが、徳之島方言、喜界島方言とちがって、*aNbě:* がすりきれた (*nudaNbě:*) のようなかたちはない。

- ・ *numjuN aNbě:do*. ノム ヨウダ (ソウダ) ヨ。
- ・ *izjaN aNbě:do*. イッタ ヨウダ (ソウダ) ヨ。

(10) うたがい—たずね法はあいてをもとめない疑問や、直接きくより間接的なたずね、遠慮した、やわらげた質問をあらわす。このかたちは終助辞の *-ka*、およびそれにさらに助辞がついたつくりの *-kaja:*, *-kai:* を叙述法断定の連用起源形、ヲリ形、および推量形につけてつくられる。*~ka* をうたがい—たずね法第一、*~kaja:* を第二、*~kai:* を第三となづけておく。たずね法とちがって、うたがい—たずね法には疑問詞のありなしによるかたちの区別はない。また、うたがい—たずね法をつくる独自の語幹もたない。*~kai* は *~kai:* ともなるが一方だけをあげておく。(シヨッタすぎさり形は、第一から第二までのいずれにも

みられない。

なお、うたがいーたずね法等第三 nudikaiの

(みとめ動詞終止形、うたがいーたずね法第一)

断	連用起源形	すぎさらず	シタすぎさり	シヨッタすぎさり
	定	numka	nudīka	
	推	numjurka	nudaka	numjutaka
	量	numjuroka	nudaroka	numjutaroka

(うたがいーたずね法第二)

断	連用起源形	numkaja:	nudī kaja:	
	定	numjurkaja:	nudakaja:	numjutakaja:
	推	numjurokaja:	nudarokaja:	numjutarokaja:

(うたがいーたずね法第三)

断	連用起源形	numkai	(nudī kai)	
	定	numjurkai	nudakai	numjutakai
	推	numjurokai	nudarokai	numjutarokai

うたがいーたずね法はふつう、あいてのことより第三者のことを問題にする。あいてのことを問題にしたらずね的であるが、～ka, ～kaja: は一般にたずね的になる。

- ・ sēhē numjurka. (キミハ) サケヲ ノムカ。(－numjur. ノム)
- ・ taro:ja sēhē numjurka. 太郎ハ サケヲ ノムカ。(－numjur. ノム)
- ・ aN ²cjuja sēhē nudakaja: . アノ ヒトハ サケヲ ノンダカネ。(のんだかのまないかしりたい)
- ・ nu: nudarokaja. ナニヲ ノンダダロウカネ。
- ・ izjakai. イッタカネ。(カワイソウニ)

sēhē numjurka. とあいてにたずねたら、それはいまこのさけをのむかどうかという個別的なことではなくて、一般的習慣をたずねている。(そこでこたえも自分のことだが、ヲリ形になる。) aN ²cjuja sēhē nudakaja: . はあいてにきくことが中心で、それにくわえて自問する感じという。～kai のかたちはあいてにきかせながらはなしてのきもち、あわれむような感情をふくませる。また、推量のうたがいーたずね形はうたがいのようになるようである。

ここでも numjurka, ～kaja:, ～kai は、ノムカ(ネ)に対してノンデイルカ(ネ)になるこ

とがあるが、そんなにおおくない。

つぎにみるたずね法に対して、うたがい—たずね法は推量形からもつくられるのが特徴的だが、推量形からでないばあいでも、うたがい—たずね法は、標準語に訳するばあい、—スルダロウカ（ネ）のようにしたくなることとおおい。これはうたがいの意味あいの存在がそうさせるのだろう。

(11) たずね法は疑問詞をともなわないたずね文につかう一般たずね形と、疑問詞つきのたずね文につかう疑問詞たずね形とにわかれる。一般たずね形には連用起源終止形に *-na* を膠着させてつくる *na* 形がまずある。ただし、*na* 形すぎさらずはヲリ終止形に *-na* を膠着させたかたちから前進同化によって変化したとおもわれる、(numjurina>numjurinja>…>) numjuNnja のかたちがふつうつかわれる。もうひとつの一般たずね形は *mi* 形といっておくが、なりたちとしては *mi* 語尾形に由来するとかんがえられる。(与論島方言で諸鈍の numjumi にあたるかたちは numjumi: で、また他のたずね形、うたがい形にてらして、たずね—うたがいの「終助詞」*-i:* がとりだされる。諸鈍方言のうたがい形や疑問詞たずね形にあらわれる *-i:* とも同源だったとすれば、numjumi…のとき *-i* と中舌化しているところに (numju-mu-i:) あるいは (numjumu-i:) のような原形がかんがえられるかどうか。(ちなみに沖永良部方言では *-mu* が動詞終止形である。)

疑問詞たずね形は連用起源形に *-i:* を膠着させる。ただし、すぎさらずはヲリ終止形のままで、特別のかたちはないが、便宜上この numjur を活用表にくわえておく。

たずね文の述語には、たずね法の語形のほか、さきにふれたうたがい—たずね法のかたちもなることができる。叙述法のかたちもたずね文の述語になる。これらについても例文をだすことにする。

(終止形たずね法)

一般 たず ね 疑問詞たずね	na 形	連用終止	すぎさらず	シタすぎさり	シタッタすぎさり
		ヲリ終止	numna	nudīna	numjutīna
	mi 形		numjuNnja		
			numjumī	nudamī	numjNtamī
		numjur	nudī'i:	numjutī'i:	

- ura: kuN sehē numna. キミハ (イマ) コノ サケラ ノンデ イル トコロカ。
- zi: kakna. 字ヲ カイテ イル トコロカ。
- nja: ki:na. モウ キツツ アル トコロカ。

- ・ sēhē numjuNnja. (習慣的ニ) サケヲ ノムカ。 / (コノ) サケヲ ノムカ。
- ・ sēhē nudīna. サケヲ ノンダカ。

一般たずねの na 形すぎさらずで numna は現在継続中のうごきについてたずねる。ヲリ終止 numjuNja は、個別的なうごきについても習慣的な状態についてもたずねることができる。あいてはふつう numjum でこたえる。

mī 形は na 形にくらべて、モーダルな面で中立的でなくて、たずねての予期、先入見（動作がおこなわれなだらう、などの）、また、すすめる気のあるときなどにつかわれる。

- ・ zi: ka²kjumī 字ヲ カクノカ。
- ・ ura sēhē nudamī. キミハ サケヲ ノンダノカ。

疑問詞たずね形は nu: ナニ、 dīr ドレ、 ta(r) ダレ、 da: ドコ、 it(i) イツ、 ikjaqsa イクラ…のような疑問詞をともなうたずね文の述語になる。

- ・ nammja i²kut narjo: r. アナタハ イクツニ ナリマスカ。
- ・ nu: nudi'i: . ナニヲ ノンダカ。
- ・ ta(r)ga kuN sēhē nudī'i: ダレガ コノ サケヲ ノンダカ。
- ・ nu: numjur. ナニヲ ノム。

(12) うたがい—たずね法のかたちがたずね文の述語にもなることはまえにみたが、疑問詞たずね文の述語には、たずね法のメンバーでないかたちがくわわることもある。叙述法の語形がたずね文の述語にくわわる例を、かかりむすび終止形のばあいからみていく。

かかりむすび終止形が疑問詞たずね文をつくる時は、かかりに～ga のかたちがあらわれる。かかり助辞の～ga は、古代日本語のかかり助辞の -ka と同源とおもわれる。かかきの～ga がきても、かかりむすび終止形にならないこともある（うしろの2例）。

- ・ ta(r)ga ka²kjuN. ダレガ カクノカ。
- ・ nu²ciga icjaN. ナント イッタカ。
- ・ nuga nudaN. ナニヲ ノンダカ。
- ・ nuga kjuN. ナゼ クルカ。
- ・ taga ikjur. ダレガ イクノカ。
- ・ taga nudī. ダレガ ノンダノカ。

かかき部分の～ga が疑問詞でないときもあるようだが、終止形の範囲は確認してない。

- ・ sēhēga numjuro. サケヲ ノムダロウカ。

連用起源の終止形も疑問詞をうけることができる。

- ・ da: ik. ドコヘイクノカ。（どこかへいくのがわかっている）
- ・ da:ha²ci ik. (いえないことはない)
- ・ nu: nudī. ナニヲノンダ。

・ *nu:ci ici*. ナンテイッタカ。

da:ik と *da:ha²ci ikjur* は、ともにいくのがわかっているときにつかうようだ。活用表にあげなかったつくりのたずね文の述語になるかたちとして、引用形式にひっぱられたさそいかけ形起源の *numoci* がある。このかたちは疑問詞のありなしに関係なくつかえる。-*ci* のつかないかたちは、諸鈍方言では、つかえない。

・ *uraja sehē numoci*. キミハ サケヲ ノモウツテカ。

・ *nu: atmīroci*. コレカラ ナニヲ アツメヨウト イウノカ。

・ *da:ha²ci ikjoci*. ドコヘ イコウツテ。(いくかいかないかわからないとき)

このいいかたにていねいないろあいはなく、したしみをもったみぢかなひと、後輩などに対してつかう。

～*samī* (*numjuNsamī*, *nudaNsamī*, *numaNsamī*...) のようなかたちはしらべもらした。

(13) たずね形は感動、反語、命令などたずね以外の意味であらわれることもある。さいごの例はきまり文句化している。

・ *aN²cjum sizina*. アノ ヒトモ 死ンダカ。(感動)

・ *namagadī biNkjo: sīraN muNna ithara biNkjo: sjur*. イママデ 勉強シナイ モノハイツカラ 勉強スル。(反語)

・ *arga ikjadana ukjumī*. カレガ イカズニ イルモノカ。

なお、*numaNna* ノマナイカ→ノメのような例はうちけし動詞のところでふれる。

(14) 叙述法、うたがいーたずね法、たずね法以外のはたらきかけ法、ねがい法はテンスの対立をもたない。ただし、非ヲリ形とヲリ形の対立はかかえこんでいてアスペクチュアルな対立をしめす箇所がおおい。はたらきかけ法、ねがい法の活用表を一括してしめす。

(はたらきかけ法)

ムード	つくり (アスペクト)	かたち
さそいかけ	非ヲリ形	<i>numo</i>
	ヲリ形	<i>numjuro</i>
さそいかけ	非ヲリ形	<i>numoka</i>
	ヲリ形	<i>numjuroka</i>
命令	非ヲリ形	<i>numī</i>
	ヲリ形	<i>numjurī</i>
命令ーたのみ	非ヲリ形	<i>numījo</i>
	ヲリ形	<i>numjurījo</i>

すすめ	うちけし起源形	numaNna
	条件起源形	
(ねがい法)	dana形	numadana

(15) さそいかけ形はそのままでははなしての意志をあらわすことがおおく、さそいかけをあらわすときは -ja がふつう膠着する。numjuro は推量形と同音形式としてあつかった。

- ・ iziroja. デヨウヤ。
- ・ sēhē numjuroja. サケヲノンデイヨウヤ。
- ・ waga mirjo. ボクガミヨウ。

さそいかけ形はうたがいーたずね形をつくる -ka をつけることができる。

なお、うちけしの一般たずねの mī 形 numamī はさそいかけ的にもつかうことができるようだ。

(16) 命令形は「終助詞」のつかない命令形 1 のほかに、-jo のついたかたちを、命令一たのみ形としてあげておく。これは、-jo がつくると命令のきもちがよわくなって、標準語の～シテクレのような感じになるらしいからである。命令形には -jo 以外にも -ciba がついて、numiciba ノメッテバのようになることもあるが、これは活用表からはぶいた。

(17) おすすめ形として活用表にあげたかたちは、ともにこのカテゴリー固有のかたちでなく、現在でもそれぞれ、うちけしの一般たずね形、みとめの条件形としての用法がある。さしあたって統語論で述語のつくりを記述するようがないので、形態論のワク内にわりこませておく。numaNna はノマナイカがあいてにすすめる意味になり、numba ノメバはノメバがおなじくノメバイイ、ノンダラドウダのような感じであいてにすすめることになる。なお、徳之島方言では条件形起源のかたちはすすめの意味になるが、うちけし起源のかたちはさそいかけの意味である。また、ヲリ系列の条件形 numjurba はすすめの意味は未確認だし、うちけしのたずねでは (numjuraNna) からしてないようだ。

nuga+うちけし動詞のかかりむすび終止形ですすめをあらわすいいかたがある。

- ・ nuga kamaN. (ナゼ タベナイ) タベトラ イイノニ。
- ・ nuga koN. (ナゼ コナイカ) キトラ イイノニ。
- ・ nuga komci. ナゼ コナイノカ。(たずね)

(18) ねがい形 numadana もうちけしの連用形としてつかわれる。どちらもすぎさらず系列はないし、シヨル語幹からの (numjuradana) もないようである。ねがい形 numadana に

かわり語形 numagana があるかもしれない。(うちけし連用形は numagana、numaNgana がある。)

- ・ sjeq²ka²ku abījuN muN, ikjadana. セッカク ヨブノニ イケバ イイノニ。
- ・ gaqsa sēhē numadanaja: . ソンナニ サケヲ ノミタイナ。
- ・ arga ikjadana waga ikjum. アレガ イカナイノデ ワタシガ イク。(連用形)

これらはうちけしの連用形 numadana ノマナイデの意味から、ノミタイ、ノメバイイノニのようなねがいの意味になってきたとおもわれる。また、はたらきかけ法とねがい法の関係は、はなしてとあいてとの関係のしかたの点で、たずね法とうたがい法の関係ににている。徳之島方言では諸鈍 numadana に対応する numadaN はすすめ形としてあらわれる。諸鈍方言ですすめる文 nuga~の訳とねがい形の訳とが、はなしての標準語へのおきかえによっておなじになっているのも、偶然とはいえないかもしれない。

条件形 numba は numbaja: (numba ja:) となつてはなしてのねがいをあらわす文をつることができる。なお、例文の waNdaro はワタシデアロウト。

- ・ waNdaro ikbaja: . ボクモ (イケタラ) イキタイナア。
- ・ sēhē numba ja: . サケヲ ノミタイナア。

(19) うちけしの動詞の終止形をいままでみてきたようにならねば、つぎのとおりである。まず、叙述法は、みとめ動詞とちがって、テンスですぎさらずに非ヲリ形語幹とヲリ語幹がたつので、すぎさをふくめて系列がよつになる。うちけし動詞だけでまとめれば、非ヲリ形うちけし動詞、ヲリ形うちけし動詞のふたつがたてられそうである。この点で、みとめ動詞のばあい以上に、非ヲリ形に対して、ヲリうちけし形の numjurit, numjuraNtī 以下を、文法的な派生系列としてあつかうことが可能になってくる。みとめ系列にあわせて、いまのところこのようにまとめたが、ムードのワクやなづけも多少かわっている。

(うちけし動詞叙述法)

テンズ=アスペクト		す ぎ さ ら ず		す ぎ さ り	
		非ヲリ形	ヲリ形	非ヲリ形	ヲリ形
ムード	連用起源形	numat	numjurit	numaNtī	numjuraNtī
	apocope 形	—	—	numaNta	numjuraNta
定	m 語尾形	numam	numjuritam	numaNtam	numjuraNtam
法	動名詞起源形	numas	numjuritas	numaNtas	numjuraNtas
	かかりむすび形	numaN	numjuritaN	numaNtaN	numjuraNtaN
推	量 法	numaNdaro	numjuritandaro	numaNtaro	numjuraNtaro

みとめ動詞とつくりの点でちがうところは、みとめ動詞のヲリ形～rでおわるかたちにあたるものがきえている点である。そこでみとめ動詞なら numjur, muda... となるところがすぎさり系列しかのこらなくなったので、なづけを apocope 形とした。連用起源形の～tは～ズに対応する。～ti は～テに対応するが、numat... numaNti... の連用起源形はどれも連用形としての用法はない。また、m 語尾すぎさらず系列で～mのかたちをたもっていることは、奄美大島南部方言の特徴である。こうしてみとめ動詞同様、うちけし動詞でも m 語尾形は外形上の統一性がみとめられるが、すぎさらず系列での本来のうちけし接尾辞と m 語尾とのかかわりが問題になる。おなじことは、動名詞起源形のすぎさらず numas, numjuras についてもいえるだろう。徳之島方言にみられる numaNsi, 与論島方言の numaNsi, numaNnusi のようなうちけし接尾辞をふくんだ動名詞形は諸鈍方言にはみられない。

推量法すぎさらずは連体形 numaN, numjuraN に -daro を融合させた標準語式のつくりで、みとめ動詞でふれた aNbe: のすりきれから生じたかたちや、徳之島式の numumē: 、喜界島方言の numaNmē: のようなメー系のうちけし推量形はでてこない。

以下、例文をしめす。断定法の各形のつかいわけの記述は今後にまわす。

- ・ (numi. ノメ。といわれてー) ba, numat. イヤダ、ノマナイ。(あいての命令へのはなしての反発)
- ・ hoNna jumaNta. 本ハ ヨマナカッタ。
- ・ simaN²cjuja bi:ruja aNmar numam. シマノ ヒトハ ビールハ アンマリ ノマナイ。
- ・ kju:ja sehēja numam. キョウハ サケハ ノマナイ。
- ・ (ikjaqsa nu: . ソラ [カレハ] イカナイジャ ナイカ。ー) wanum ikjas. ボクモ イカナイ。
- ・ sehēdu numaN, bi:ruja numjur. サケコソ ノマナイガ ビールハ ノム。
- ・ ar'ja nadēha²ci ikjaNtaro. カレハ 名瀬ニ イカナカッタダロウ。

-do(:) はみとめ動詞のヲリ形に膠着したが (numjuqdo(:) ...)、うちけし動詞では numaNdo: , numaNtado: のようになる。このすぎさらずの numaNdo: からとりだされる numaN- は、みとめ動詞 numjuqdo: や、また、うちけし動詞のすぎさり numaNtado: にてらすと、分布上みとめ動詞でヲリ形とよんだところに対応し、うちけし動詞で apocope 形とした箇所の活用表の余白にはいつてくる。だとすれば、かかりむすび終止形 numaN と同音形式になっていることになる。

(20) うちけし動詞のうたがいーたずね法もみとめ動詞のそれに対応して3種にわかれる。活用は、一括してかかげるが、こまかいところの異同があるかもしれない。

(うちけし動詞うたがいーたずね法 1、2、3)

テンス=アスペクト ムード-つくり	す ぎ さ ら ず		す ぎ さ り	
	非ヲリ形	ヲリ形	非ヲリ形	ヲリ形
断 連用起源形	(-)	(-)	numaNtīka	numjuraNtīka
1 定 apocope形	numaNka	numjuraNka	numaNtaka	numjuraNtaka
推 量	numaNdaroka	numjuraNdaroka	numaNtaroka	numjuran taroka
断 連用起源形	(-)	(-)	numaNtī kaja:	numjuraNtī kaja:
2 定 appocope形	numaNkaja:	numjuraNkaja:	numaNtakaja:	numjuraNtakaja:
推 量	numandarokaja:	numjuraNdarokaja:	numaNtarokaja:	numjuraNtarokaja:
断 連用起源形	(-)	(-)	numaNtīkai:	numjuraNtīkai:
3 定 apocope 形	numaNkai	numjuraNkai	numaNtakai	numjuraNtakai
推 量	numaNdarokai	numjuraNdarokai	numaNtarokai	numjuraNtarokai

- ・ ar'ja sēhēja numaNka. アレ (カレ) ハ サケハ ノマナイカ (たずねにも)。
- ・ (× uraja sēhēja numaNka. 2人称はダメ)
- ・ taga numaNkai. (たくさんいるなかで) ダレガ ノマナイカナ。

(21) うちけし動詞たずね法の活用もみとめ動詞に準ずる。

(うちけし動詞終止形たずね法)

テンス=アスペクト ムード-つくり	す ぎ さ ら ず		す ぎ さ り	
	非ヲリ形	ヲリ形	非ヲリ形	ヲリ形
一般た na 形	numaNna	numjuraNna	numaNtīna	numjuraNtīna
ずね mī 形	numamī	numjuramī	numaNtamī	numjuraNtamī
疑問詞たずね	numat	numjurit	numaNtī'i:	numjuraNtī'i:

- ・ ura: sēhēja numaNna. キミハ サケハ ノマナイカ。(ノマナイと予想して)
- ・ sēhē numamī. サケヲ ノマナイカ。(さそい的にもなる)
- ・ nu: numat. ナニヲ ノマナイ。(× nu: numam. はダメ)

(22) 疑問詞たずねにかかりむすび終止形をつかうこともできる。これもみとめ動詞と同様である。これはすすめのにもなる。

- ・ *ura sēhēja numaNna*. キミハ サケハ ノマナイカ。(ノマナイと予想して)
- ・ *sēhē numamī*. サケヲ ノマナイカ。(さそい的にもなる)
- ・ *nu: numat*. ナニヲ ノマナイ。(× *nu: numam*. はダメ)

うちけしの一般たずね形 *numaNna* のすすめの用法は、すすめ形としてあつかつてある。

(23) うちけし動詞はたらきかけ法は、うちけしの命令(禁止)のかたちと命令一たのみのなかたちとがある。このつくりもそれぞれみとめ動詞のそれに対応する。ただし、みとめ動詞にみられたヲリ形 *numjurī*, *numjurījo* にあたる (*numjuNna*), (*numjuNnajo*) はない。ただし、シトル系派生動詞の *nuduNna*, *nuduNnajo* はある。例文もだしておく。

(うちけし動詞はたらきかけ法)

ムード	かたち	
命令	<i>numna</i>	・ <i>sēhēja numna</i> . サケハ ノムナ。 ・ <i>uqkara ʔwī:ja numnajo</i> . ソレカラ ウエハ ノムナヨ (ノマナイデ)。
命令一たのみ	<i>numnajo</i>	・ <i>itīgadīm nacjuNna</i> イツマデモ ナイテルナ。 ・ <i>gasi nuduNnajo</i> . ソンナニ ノンデルナヨ (ノンデナイデ)。

(24) うちけし動詞のねがい法はみあたらない。

(25) つくりのうえで、*numjur* からの文法的な派生動詞として形態論であつかう必要のありそうなかたちのうち、気づいているものをあげておく。いままでにふれたものはよく。

numjur のアスペクト的な派生動詞として、*numjurjur* のようなかたちがあるが、過去の *numjurjuta* はあまりいわなくて、*numjuta* をつかうなど、活用体系がどのくらいそろうかは不明である。つくりとしてはノミヲリヲリにあたる。

アスペクチュアルな派生動詞として *numjur* に対立して活用体系もしっかりしているのは *nudur* である。ノミテヲリ、ノンドルにあたる。この派生動詞のシテヲリヲリ形 *nudurjur* もわからないことはない。

つくりの点でシテアル(アリ)にあたる *nudī ar* もあるが、標準語より用法がひろい。また、*nudī ar* のうちけし *nudī nem* (マダノンデナイに対して同音形式で *nudī nem* (ノンデモウナイ) ノンデシマッタがある。とりたての *nudīja nem* はシテアルのうちけしのとりたて(マダ ノコッテイル)。*nudī ikjur* ノンデイク、*nudī kjur* ノンデルのようなかたちもある。ボイス的な派生動詞はうけみ、可能が *numarīr*, 使役が *numasjur* である。ただし、「サ変」*sjur* の使役形は *simīr*, *simī(r)jur*. また、サレルにあたる *sīrarīr* は *sjur*

の可能動詞でもある。

やりもらい動詞ではシテヤルにあたるかたちがなく、シテクレルーシテモラウの「クレモライ」のワクぐみなのは東北方言などと同様である。nudī ʔkurīr ノンデクレル (cf. ドウシテクレヨウ)、nudī mora(r)jur ノンデモラウ。

その他 nudīm mir ノンデミル (ノンデモミルに対応か)、nudī misi(r)jur ノンデミセルや nudī ukjur ノンデオクのようなかたちもみとめられる。うやまい動詞は規則的には numiNsjur ができるが、ノムに関しては misjur メシアガルもある。

派生形容詞的な numbusja ノミタイ、numcjagēsa ノミソウダのうち前者からはノミタガルにあたるくみたて動詞 numbusja sjur ができる。

(つげたり) 本稿は筆者が以前発表した「奄美諸島加計呂麻島諸鈍方言の動詞の語形変化おほえがき」(学習院女子短期大学『国語国文論集』2、1973)につながるが、直接には1985年空中分会で口頭発表した「諸鈍方言の動詞の活用体系おほえがき」(1)に手をくわえたものである。終止形以外についても、口頭発表の原稿があるが、今回はそれまで検討することができなかった。諸鈍方言については一貫して、金久 正先生におしえていただいている。金久先生は諸鈍方言の文法現象のなかでもとりわけふるい層に興味と関心をしめされ、おおくの事実を丹念におもいだしてくださった。ふかく感謝する。それを体系化する筆者のちから不足から、意味=内容面を中心としてぬけおちがあるが、今後の研究のたたき台になることをねがう。

故中本正智先生には、奄美方言を勉強するヤマトウンチュということで、いろいろ目をかけていただき、しばしば論文の発表をもとめられた。中本先生とちがっていくつも原稿が用意してあったりすることはないので、なかなか要望にそえなかった。諸鈍方言に関して、筆者の旧稿をなんとかしろというおはなしがあったようにおもう。いまもつたない本稿ではあるが、中本先生にみていただけなくなってしまった。合掌。